

2025 年度「卒業生アンケート」の結果について

—大学・短期大学部および企業向けアンケートの結果—

2026 年 7 月

キャリアセンター 教育開発支援センター

2025 年 12 月にキャリアセンターと連携し、卒業生および企業へのアンケート調査を実施した。対象は卒業後 3 年を経過した 2023 年 3 月卒業生（大学 19 年度生、短大部 21 年度生）である。

卒業生向けには、大学生活の充実度や、社会人になって感じる「在学中に身に付けておけば良かった能力・資質」等を中心に本学における教育の質向上に資する設問とした。企業向けには、教育開発支援センターが実施する「成長実感調査」で使用する汎用的能力 12 項目を用いた。

このアンケート調査は、卒業生が社会で求められる能力を明らかにし、その結果を教育現場にフィードバックすることで、在学時と卒業後の視点から教育の適切性を検証する「実学教育型の内部質保証」を目的としている。

1. 調査の概要

- (1) 実施時期：2025 年 12 月 22 日～2026 年 2 月 28 日
- (2) 調査方法：Google フォームにより実施したアンケート調査
- (3) アンケート回答数および回答率

表 1. アンケート回答数および回答率

	対象	依頼数	不達数	回答数	回答率
大 学	19 年度生	1,153 名	103 名	142 名	12%
短 期 大 学 部	21 年度生	39 名	0 名	7 名	18%
企 業	大学 19 年度生が就職した企業	290 社	18 社	71 社	26%
	短大 21 年度生が就職した企業	20 社	1 社	5 社	25%

註：回答率は回答数を依頼数で除して算出した。

2. 卒業生アンケート（大学）

(1) アンケート回答者の属性

回答者 142 名のうち男女比は 7：3 で、入学時（8：2）と比べると女性比率が上昇した。就職先の業種はサービス業・小売業・情報通信業など多岐にわたり、職種は営業・販売職が約 3 割を占める。雇用形態は正社員と公務員、教員が計 113 名（80%）と多数である一方、非正規雇用は 16 名（11%）である。課外活動に参加していた学生は 61 名（43%）であった。卒業時に就職した 129 名のうち、離職・転職経験者は 47 名（36%）で、内訳は 1 年以内 10 名（21%）、2 年以内 14 名（30%）、3 年以内 23 名（49%）である。離職理由は「キャリアアップ」と「労働時間などの労働条件に不満」であり、後者については、就職活動時に労働条件や職場環境を十分に把握することで、入社後のミスマッチを抑制できる可能性がある。学生が納得して進路を選択できるよう、企業研究の方法に加え、求人情報の読み取り方や働き方の確認方法について、引き続き支援の充実を図ることが望まれる。

(2) 調査結果の要約

① 大学生生活の充実度

4 点尺度による測定の結果、「非常に充実していた」の割合は 28.2%であり、2024 年度の 27.2%とほぼ同じであった。また、「ある程度充実していた」の割合は 47.2%で、合わせて 75.4%が肯定的な回答を寄せた（図 1、表 2）。

表 2. 大学生生活の充実度について（学部・学科別）（人）

学部・学科	1	2	3	4	合計
商 学 部	7	2	1	2	12
経 営 学 部 経 営 学 科	3	13	2	2	20
経営学部ホスピタリティ経営学科	6	7	3	1	17
経 済 学 部	7	26	8	1	42
法 学 部	6	6	2	2	16
外 国 語 学 部	5	6	1	2	14
国 際 学 部	1	5	1	2	9
情 報 学 部	5	2	4	1	12
合 計	40	67	22	13	142

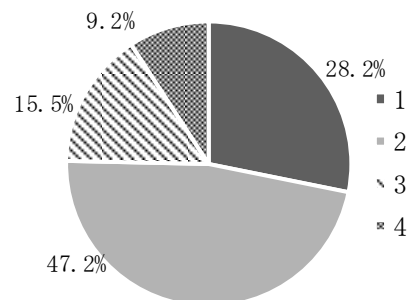


図 1. 大学生生活の充実度について

註) 1. 非常に充実していた、2. ある程度充実していた、3. あまり充実していなかった、4. 充実していなかった

② 大学時代の学修が全体として現在役立っているか
「非常に役立っている」と回答した卒業生は 15%で、2024 年度の 16%とほぼ同率であった。また、「ある程度役立っている」の回答は 54%で、合わせて 69%が肯定的な回答を寄せた（図 2）。

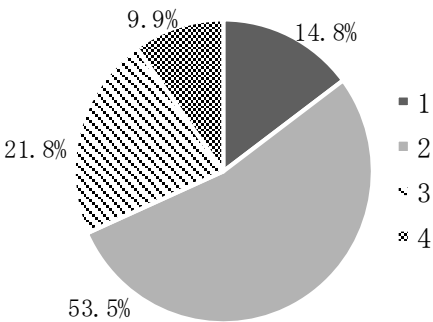


図 2. 大学時代の専攻科目、語学、共通科目（一般教養）、ゼミナールなどで学んだことや経験は、総合的に、どの程度役立っていると思いますか。
 註) 1. 非常に役立っている、2. ある程度役立っている、3. あまり役立っていない、4. 役立っていない

③ 大学で良かったもの、良くなかったものの選択設問
 大学で良かったと思うこと、良くなかったと思うことを 3 つ選択する設問結果を表 3 に示した。図 3 は良かった点として選択された件数の多い順に並べ替えたもので、その項目を良くなかったと答えた件数も併せて示した。⑨キャリアサポート、①教員のサポートを「良かった点」として挙げる卒業生が多い。また、施設面では、⑥図書館、⑦食堂、④キャンパスの雰囲気を選択する卒業生が多かった。一方、⑩事務サービスを良かった点として選択した回答は少なかった。⑤キャンパス周辺の環境は、「良くなかった点」に挙げる卒業生が多い。自由記述欄では、コロナ禍によりキャンパスに通う機会や学生同士の交流、授業や課外活動が制限されたことを挙げる回答が多く見られた。

表 3. 大学で良かったもの、良くなかったものを次の項目から 3 つ選択した結果（人）

項目	良かった点	良くなかった点
①教員のサポート	40	24
②教育内容	25	22
③教育施設	20	24
④キャンパスの雰囲気	26	29
⑤キャンパス周辺の環境	20	31
⑥図書館	45	3
⑦食堂	28	25
⑧ラウンジ等	7	19
⑨キャリアサポート	56	20
⑩事務サービス	10	17
⑪課外活動	27	25

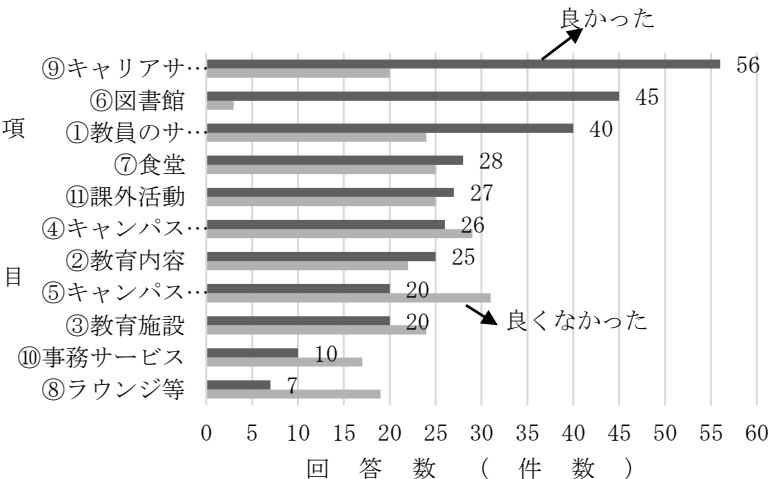


図 3. 大学で良かったと思ったこと、良くなかったと思ったこと（良かった点の多かった順）

④ 課外活動の有無と大学生活の充実度との関係について
 課外活動への参加状況と大学生活の充実度との関係を確認するため、卒業生を課外活動に参加した学生と参加していない学生に分けて集計した。
 その結果、「非常に充実していた」と回答した割合は、課外活動ありが 41%（61 名中 25 名）、課外活動なしが 19%（81 名中 15 名）であり、課外活動に参加した学生の方が高い割合を示した。また、「非常に充実していた」と「ある程度充実していた」を合わせた割合についても、課外活動ありが 87%（61 名中 53 名）、課外活動なしが 67%（81 名中 54 名）となり、課外活動に参加した学生の方が、大学生活を肯定的に捉える傾向がみられた。この差は統計的にも有意であり（ $p < 0.01$ ）、2024 年度に引き続き、課外活動への参加と大学生活の充実度との間には一定の関連があることが示された。ただし、課外活動への参加そのものが充実度を高めたと直ちに判断することはできないため、学修状況など他の要因も含めた検討が必要である（表 4）。

表 4. 課外活動の有無と大学生活の充実度とのクロス集計（人）

大学生活の充実度	課外活動の有無		計
	あり	なし	
1. 非常に充実していた	25	15	40
2. ある程度充実していた	28	39	67
3. あまり充実していなかった	4	18	22
4. 充実していなかった	4	9	13
計	61	81	142

3. 卒業生アンケート（短期大学部）

(1) アンケート回答者の属性

回答者 7 名の現在の就業業種は、建設業、製造業、情報通信業、不動産業、宿泊・飲食業であった。職種は、総合職（営業・事務）、営業・販売職、一般職（事務）であり、現在在職中の 6 名はいずれも正社員である。

また、アンケート回答者のうち、在学中に課外活動に参加していた者はいなかった。卒業時に就職した 6 名のうち、1 名が 2 年以内、1 名が 3 年以内に離職・転職したと回答している。

(2) 調査結果の要約

① 大学生生活の充実度

6 名が「非常に充実していた」、「ある程度充実していた」と回答した（図 4）。

② 大学時代の学習が全体として現在役立っているか

6 名が「非常に役立っている」、「ある程度役立っている」と回答した（図 5）。

③ 大学で良かったもの、良くなかったものを選択する設問

大学で良かったと思うこと、良くなかったと思うことを 3 つ選択する設問に対する結果を表 5 に示した。また、図 6 は、大学で良かったと回答した卒業生が多い順に並べ替え、その項目を良くなかったと回答した件数も併せて示したものである。

「良かった点」としては、②教育内容、⑦食堂が各 4 件で最も多く、次いで③教育施設、⑨キャリアサポートが各 3 件であった。特にキャリアサポートについては、自由記述欄において「第一印象や、面接時の姿勢を具体的に教えていただいたのは助かりました」といった意見がみられ、就職活動に向けた具体的な支援が肯定的に受け止められていることがうかがえる。

一方、「良くなかった点」としては、⑤キャンパス周辺の環境が 3 件で最も多かった。また、自由記述欄には「就職活動がすぐに始まり、忙しかった」といった意見もみられ、学生生活と就職活動の時期が重なり、忙しさを感じた卒業生がいたことがうかがえる。

なお、在学生への助言としては、「授業は早めに履修し、計画的に単位を修得してください」「クラブ・サークル活動は自分を成長させる大きなチャンスだと思います」といった記述があり、授業の履修、課外活動、就職活動を含め、学生生活を主体的に過ごすことの重要性が示されている。

表 5. 大学で良かったもの、良くなかったものを次の項目から 3 つ選択した結果（人）

項 目	良かった点	良くなかった点
①教員のサポート	1	1
②教育内容	4	1
③教育施設	3	0
④キャンパスの雰囲気	0	1
⑤キャンパス周辺の環境	0	3
⑥図書館	1	1
⑦食堂	4	0
⑧ラウンジ等	0	1
⑨キャリアサポート	3	1
⑩事務サービス	0	0
⑪課外活動	0	0

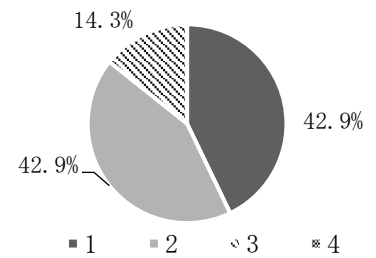


図 4. 大学生生活の充実度について
註) 1. 非常に充実していた、2. ある程度充実していた、3. あまり充実していなかった、4. 充実していなかった

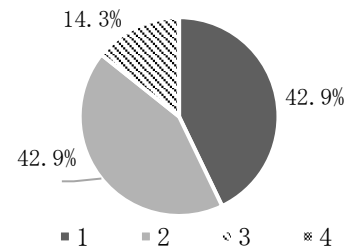


図 5. 大学時代の専攻科目、語学、共通科目（一般教養）、ゼミナールなどで学んだことや経験は、総合的に、どの程度役立っていると思いますか。

註) 1. 非常に役立っている、2. ある程度役立っている、3. あまり役立っていない、4. 役立っていない

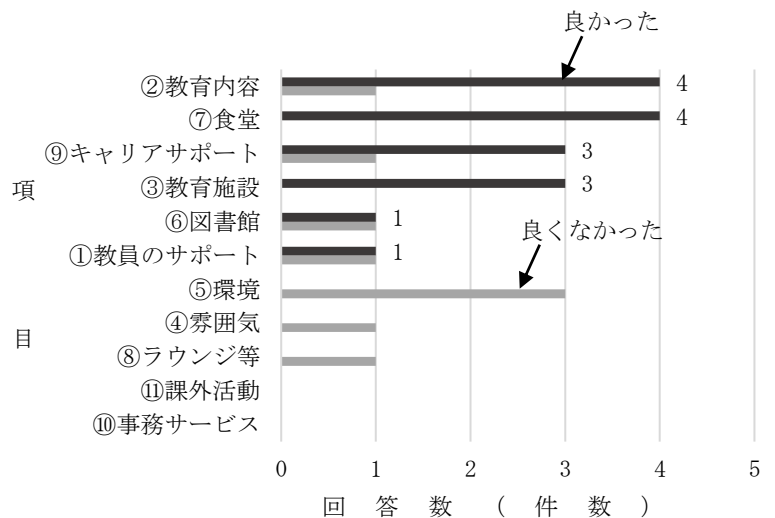


図 6. 大学で良かったと思ったこと、良くなかったと思ったこと（良かった点の多かった順）

4. 企業向けアンケート

(1) アンケート回答企業の属性

回答した 76 社において、本社所在地は大阪府が全体の 52% を占めた。また、アンケートに回答した事業所等の所在地も大阪府が全体の約 6 割を占めた。総従業員規模で見ると、1,000 人以上が 28 社で全体の 37% であった。また、業種はサービス業、小売業、卸売業をはじめ、様々な業種の企業から回答があった（図 7）。回答企業において本学卒業生が現在も継続して勤務しているかを尋ねたところ、67 社（88%）が「はい」と回答した。このほかに、19 項目について採用における重要度を聞く設問と、6 項目のルール・マナーについて本学卒業生がどの程度身に付けているかを問う設問を設けた。

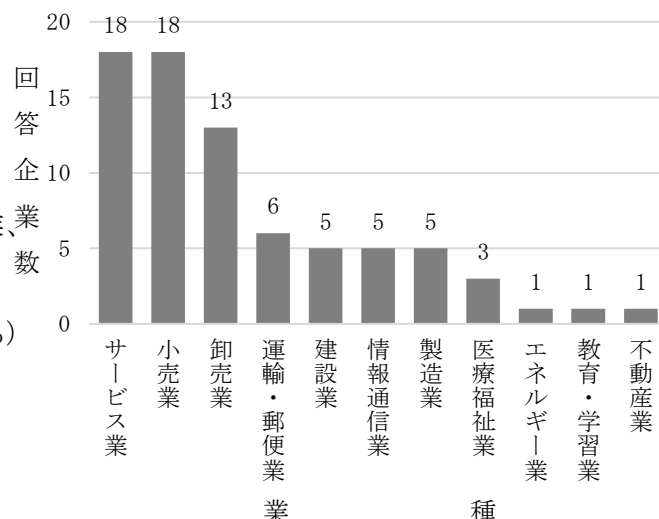


図 7. 2025 年度企業向けアンケートに回答した企業の業種

(2) 12 の汎用的能力に関するアンケート

教育開発支援センターが実施する成長実感調査で使用する汎用的能力 12 項目を用い、「企業が採用の際に重視する汎用的能力」および「本学卒業生が身に付けている汎用的能力」を聞くこととした。

5. 12 の汎用的能力を使った実学 PDCA について

先の 4. (2) の調査により、卒業生および企業から本学の教育に対するフィードバックを得ることができるようになった。これは、社会のニーズを教育に反映させ、教育の質を検証する「実学教育型の内部質保証」の一環である。

汎用的能力に関する 12 項目は次のとおりである（①所属する学部に関する専門分野の知識、②情報分析力や問題解決能力、③リーダーシップの能力（統率力）、④人間関係を構築する能力、⑤他の人と協力して物事を遂行する能力、⑥日本社会や世界が直面する問題の理解力、⑦文章表現能力、⑧プレゼンテーションの能力、⑨コンピューターの操作能力、⑩時間を有効に活用する能力、⑪視野の広い見方をする能力、⑫自らを律する能力（自己管理能力））。

(1) 身に付いたと思う汎用的能力（大学・短期大学部）

「身に付いたと思う汎用的能力」について、かなり身に付いた：5 点、やや身に付いた：4 点、どちらともいえない：3 点、あまり身に付かなかった：2 点、全く身に付かなかった：1 点として、平均値を算出した。

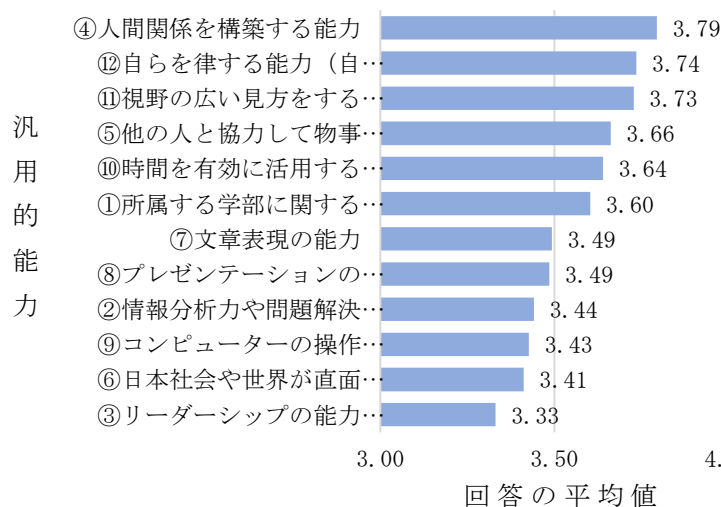


図 8. 在学中に身に付けたと思う能力（大学）

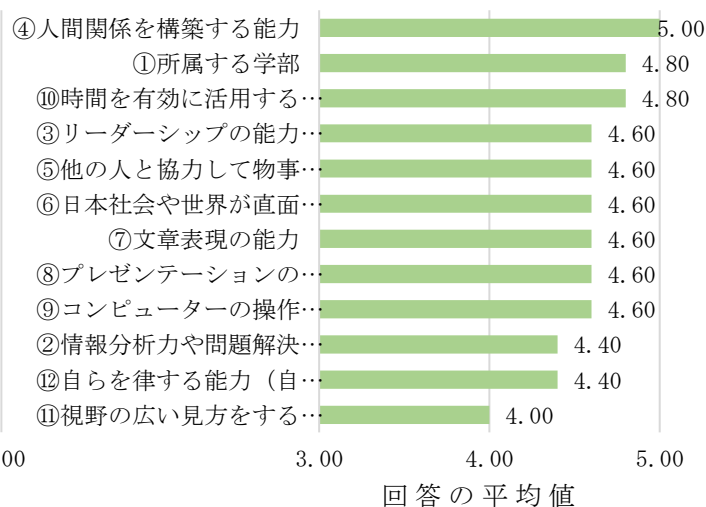


図 9. 在学中に身に付けたと思う能力（短期大学部）

図8のとおり、大学では「人間関係を構築する能力」が最も高く、次いで「自らを律する能力」「視野の広い見方をする能力」が高い結果となった。また、「他の人と協力して物事を遂行する能力」や「時間を有効に活用する能力」も比較的高く、対人関係や自己管理に関する能力を在学中に身に付けたと感じていることがうかがえる。一方、「リーダーシップの能力」、「日本社会や世界が直面する問題の理解力」、「コンピューターの操作能力」は相対的に低い結果となった。短期大学部（図9）では、「人間関係を構築する能力」が最も高く、次いで「所属する学部に関する専門的な知識」、「時間を有効に活用する能力」が高い結果となった。一方、「視野の広い見方をする能力」、「自らを律する能力」、「情報分析力や問題解決能力」は相対的に低い結果となった。

(2) 身に付けておけばよかったと思う汎用的能力（大学・短期大学部）

「身に付けておけばよかったと思う汎用的能力」は、非常にそう思う：5点、ややそう思う：4点、どちらでもない：3点、あまりそう思わない：2点、全くそう思わない：1点として、平均値を算出した。

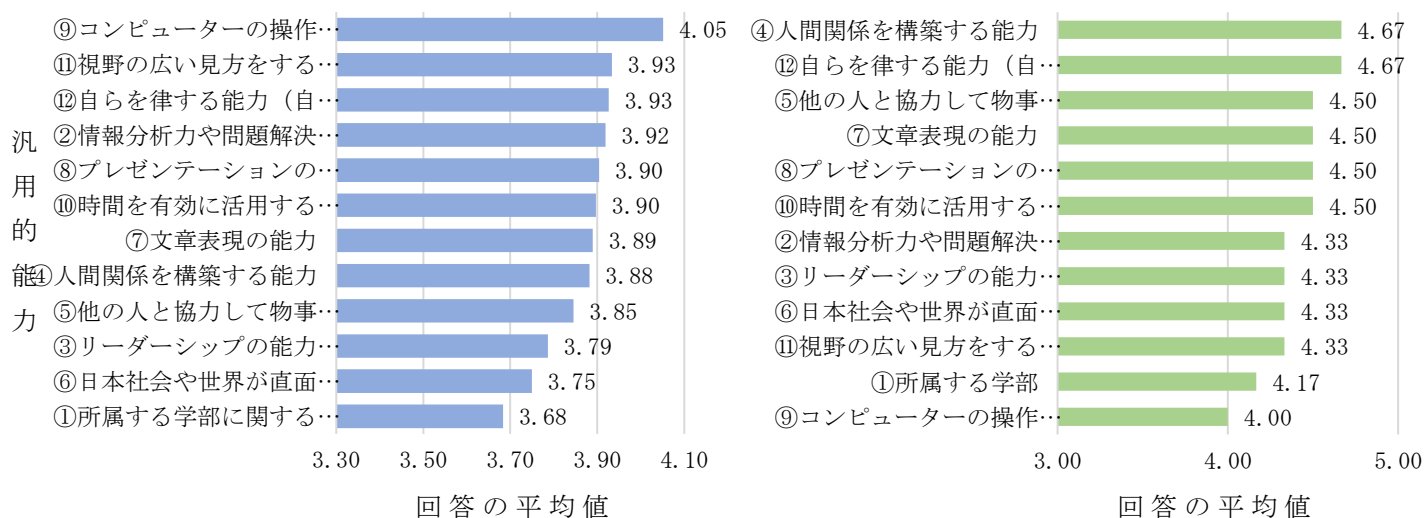


図10. 在学中に身に付けておけばよかったと思う能力（大学） 図11. 在学中に身に付けておけばよかったと思う能力（短期大学部）

大学では、図10で、「コンピューターの操作能力」を最も身に付けておけばよかったと感じ、「視野の広い見方をする能力」「自らを律する能力」「情報分析力や問題解決能力」も高かった。短期大学部では、図11のとおり、「人間関係を構築する能力」「自らを律する能力」が最も高く、「他の人と協力して物事を遂行する能力」「文章表現の能力」「プレゼンテーションの能力」「時間を有効に活用する能力」も高かった。社会で、対人関係、協働力、自己管理能力、表現力の重要性を実感しているとうかがえる。

(3) 本学卒業生が身に付けている汎用的能力

企業に対し、本学卒業生が身に付けている汎用的能力について5点尺度で尋ねた。「優れている」5点、「やや優れている」4点、「普通」3点、「やや劣る」2点、「劣る」1点として平均値を算出したところ、図12のとおり、「他の人と協力して物事を遂行する能力」が最も高く、次いで「人間関係を構築する能力」「自らを律する能力（自己管理能力）」が高い結果となった。企業からは、協働力や人間関係構築力、自己管理能力が比較的高く評価されていることがうかがえる。一方、「日本社会や世界が直面する問題の理解力」「所属する学部に関する専門的な知識」、「文章表現の能力」は相対的に低い結果となった。

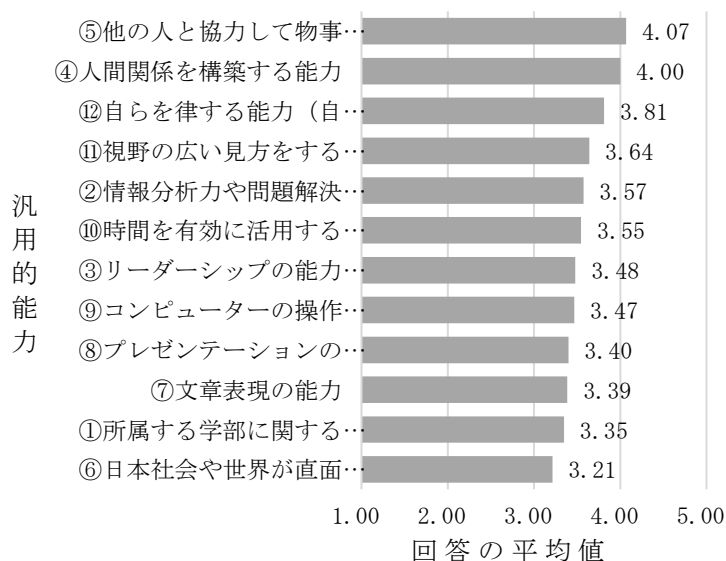
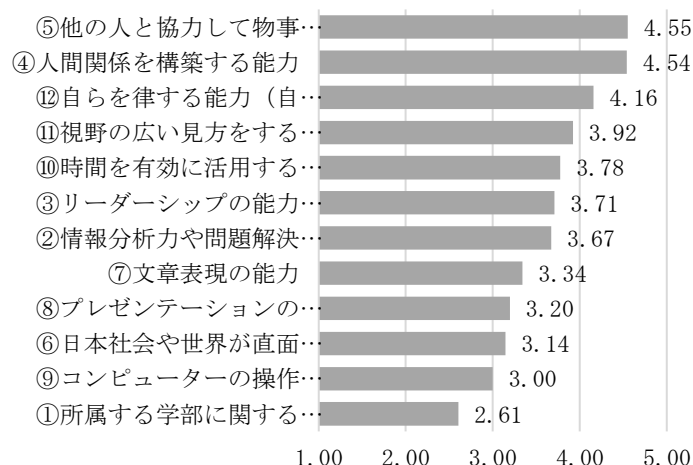


図12. 本学卒業生が身に付けている汎用的能力

(4) 企業が求める汎用的能力

企業に対し、企業が求める汎用的能力について5点尺度で尋ねた。「重視する」5点、「どちらかと言えば重視する」4点、「どちらとも言えない」3点、「どちらかと言えば重視しない」2点、「重視しない」1点として平均値を算出したところ、図13のとおり、「他の人と協力して物事を遂行する能力」が最も高く、次いで「人間関係を構築する能力」「自らを律する能力（自己管理能力）」「視野の広い見方をする能力」が上位に挙がった。企業は、協働力や対人関係形成力、自己管理能力を特に重視していることがうかがえる。一方、「所属する学部に関する専門的な知識」、「コンピューターの操作能力」、「日本社会や世界が直面する問題の理解力」における重視の度合いは低い結果であった。

汎
用
的
能
力



回答の平均値

図13. 企業が求める汎用的能力

6. まとめ

この調査によって、卒業生が社会人として必要性を感じる能力・資質を明らかにし、企業が求める人材像との比較を通じて、本学の教育の成果と課題を検証した。在学生、卒業生、企業に対して「12の汎用的能力」という同一基準を用いることで、教育改善の方向性がより明確になったと考えられる。

2025年度の調査結果から、本学の教育成果として特筆すべきは、「人間関係を構築する能力」と「他の人と協力して物事を遂行する能力」において、卒業生の自己評価と企業からの評価が共に高い点である。これらは企業が採用時に最も重視する能力でもあり、本学の教育が社会のニーズに一定程度応えていることを示している。この成果の背景には、本学の強みであるゼミナール教育等を通じた丁寧な指導や、学生同士が関わりながら学ぶ機会があると考えられ、今後も継続・発展させていくことが重要である。

一方、課題も明らかになった。大学の卒業生は「コンピューターの操作能力」を最も「身に付けておけばよかった」と感じており、ICT活用力の向上に向けた教育の充実が求められる。また、「視野の広い見方をする能力」「自らを律する能力」「情報分析力や問題解決能力」についても、社会に出てから必要性を実感していることがうかがえる。短期大学部については回答者数が限られるため慎重な解釈が必要であるが、対人関係、協働力、視野の広さ、自己管理能力の重要性を感じている傾向がみられた。

企業からは、本学卒業生の協働力、人間関係構築力、自己管理能力が比較的高く評価されている。一方で、「日本社会や世界が直面する問題の理解力」「所属する学部に関する専門的な知識」「文章表現の能力」は相対的に低い結果となっており、社会的課題への関心や理解、専門的知識、文章による表現力の育成については、今後さらに検討していく必要がある。

なお、調査の精度向上の観点から、引き続き回答率向上に向けた取り組みを進めていきたい。調査に協力いただいた卒業生、企業に御礼を申し上げるとともに、この結果を、学位授与方針の検証、カリキュラムの見直し、キャリア支援に役立てることで、図14に示す「実学教育型の内部質保証」の一環として、広い視野からの教育改善に引き続き取り組んでいきたい。

以上

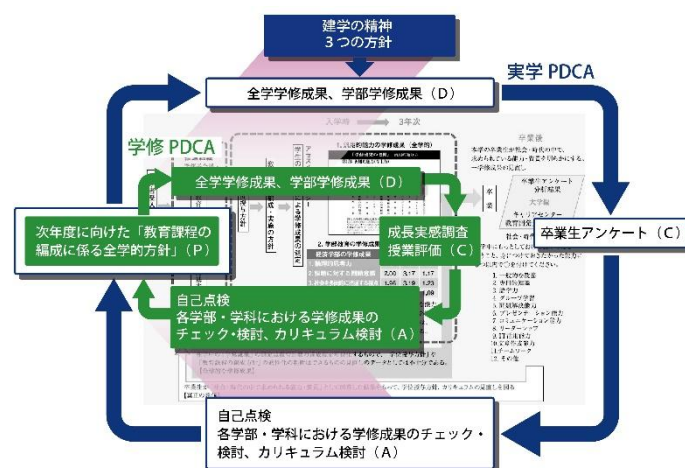


図14. 学修 PDCA と実学 PDCA の模式図